View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Hiroshima University Institutional Repository

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	猫と愛の物語 ： トマス・フラットマンの恋猫、ポール・ギャリコの仔猫のためのマニュアル、マルチウリアーノの猫のふみふみ
Auther(s)	松本, 舞
Citation	表現技術研究 , 15 : 1 - 16
Issue Date	2020-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/49076
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049076
Right	
Relation	

猫と愛の物語

―トマス・フラットマンの恋猫、ポール・ギャリコの仔猫のためのマニュアル、マルチウリアーノの猫のふみふみ

松本　舞

恋猫の奇声

イギリスの詩人、トマス・フラットマン (Thomas Flatman, 1637-1688) は、「事(こと)、恋愛に関しては猫たちを見られたし」('An Appeal to Cats in the Business of Love') と題された詩の中で、次のように愛の病に苦しむ男性に助言をします。

Ye cats at midnight spit love at each other,
Who best feel the pangs of a passionate lover,
I appeal to your scratches and your tattered fur,
If the business of Love be no more than to purr.
Old Lady Grimalkin with her gooseberry eyes,
Knew something when a kitten, for why she is wise;
You find by experience, the love-fit's soon o'er,
Puss! Puss! lasts not long; but turns to *Cat-whore*!
Men ride many miles,
Cats tread many tiles,
Both hazard their necks in the fray;
Only cats, when they fall
From a house or a wall,
Keep their feet, mount their tails, and away!

('An Appeal to Cats in the Business of Love', ll. 1-15) [1]

真夜中、互いに愛のうなり声を発する君たち、
情熱的な恋人の激痛を最も感じる猫たちよ、
君たちの引っ掻き傷やボロボロの毛並みを見てみなよ、
恋愛という仕事は、ゴロゴロと喉を鳴らすだけじゃないだろ？
フサスグリの実の目をした、年取った雌猫グリマルキン嬢は、
仔猫の頃には知っていた、何故って、彼女は賢かったからさ。
君たちは、経験でわかるのさ、恋の発作はすぐに終わるということを。

[1] Emily Fragos (ed.), *The Great Cat: Poems about Cats* (London: Everyman, 2005), p. 120.

ねこちゃん！ねこちゃん！は長くは続かない、「売女(ばいた)猫め！」へと変わるのだ。
男たちは何マイルもの道のりを馬に乗り、
猫たちは何枚もの屋根瓦の上を踏破する。
両者とも、けんか騒ぎとなれば、首の骨を折る危険あり。
ただ、猫たちは、家や
壁から落っこちても
足から着地し、しっぽをピンと立て、颯爽と去っていく。

フラットマンは、17 世紀に英国で流行した「キャッチ」と呼ばれる輪唱歌を多く書きました。輪唱歌の歌詞はきわどいものが多いといわれています。この詩のなかでも、性的な表現が多く含まれています。例えば動詞の ‘spit’ には、「射精する」という意味や「ペニスで突き刺す」という意も含まれます。

西洋の人々は、恋に狂う猫たち、多くの雄と交尾する雌猫たちの姿に人間の姿を比喩を使って重ねていたようですが、日本人は猫の生態そのものをじっくりと観察する傾向が強いように思われます。俳句の春の季語には「猫の恋」というのがあります。「喧嘩とも恋とも知らず猫の恋」と正岡子規 (1867-1902) は詠みました。猫の恋も、喧嘩も、命がけです。「恋猫の奇声怪声寒温し」という日野草城 (1902-1956) の俳句があるのですが、日本人は、春先、彼岸の頃の真夜中に、どこからともなく、にゃおーんとも、わおーんとも、なんとも表現しがたい、恋に狂った野良猫の唸り声に気付いていました。発情期の猫たちは日本の俳句の世界にたびたび登場します。「ばか猫や身体ぎりの浮かれ声」という句を小林一茶 (1763-1828) は詠んでいます。[2] また、猫を扱った小説の中での恋猫の出現率は高く、内田百閒 (1889-1971) が愛猫の失踪の日記とそれにまつわる記録を収録した小説『ノラや』の中で、「中秋名月から二三夜過ぎたころ」には「彼岸猫の季節なので、外の猫にさかりがついたら

[2] 猫の恋を季語に用いた俳句は、多く英訳もされています。Adam L.Kern は 「ばか猫や身体ぎりの浮かれ声」を ‘silly cat!/ hamming up the yowling/ with whole torso’と訳していますが、猫の恋そのものを英語に訳すことは難しいようで、発情期の猫が相手を求めて夜歩き回る様子を英語に訳していることが多いです。「寝て起きて大あくびして猫の恋」という一茶の句は ‘snoozing, stirring / taking an enormous yawn-/ feline passion’ と訳されています。(Kern, p. 259) また、松尾芭蕉の「猫の恋やむとき閨の朧月」は、‘cats mating-/ in our bedroom as they finish, / misty moonlight’ (Kern, p. 258) と訳されていて、恋、のニュアンスはあまり出ていません。本論で紹介する猫の俳句は『俳句・短歌・川柳と共に味わう　猫の国語辞典』、一茶記念館・信濃毎日新聞社出版部編『猫と一茶』、堀本裕樹・ねこまき（ミューズワーク）『ねこのほそみち』などの書籍から引用しています。恋する猫の声が変わってしまうことに日本人が耳を澄ませていたことは、「はや色に出るや猫の声がはり」（槐本諷竹、江戸時代の俳人）などの句からも見て取ることができるでしょう。

しく、家のまはりでうるさく鳴きたてる」と書いています。[3] 節分や彼岸という猫たちの発情期には、あそこでも喧嘩、こちらでも喧嘩。夜は狂おしいほどの鳴き声、そんな猫に昼に出会うと引っかき傷を背負った姿。

なぜ雌猫は拒否する？

フラットマンは「情熱的な恋人の激痛を最も感じる猫たち」といっていますが、この「激痛」とは、精神的な痛みに加え、実は肉体的な痛みをも示唆します。わずかな時間の交尾の後、雄猫が生殖器を引き抜こうとすると雌猫は雄を攻撃し、ひどい罵り声をあげます。この時の雌猫の声も、フラットマンが聞いたに違いない「愛の唸り声」のうちの一つなのです。

イギリスの動物学者、デズモンド・モリス (Desmond Morris, b. 1928) は交尾中に雌が悲鳴を上げる理由は、雄のペニスが持つ棘にあると述べています。[4] 猫のペニスはほかの哺乳類のものとは違って、鋭いとげに覆われており、棘が付け根のほうを向いているため、雄猫がペニスを引き抜くときに雌の膣壁を引っかくことになって、雌猫に激しい痛みを与える、と言うのです。現代の動物学者たちは、この痛みによって雌猫の排卵が起こり、生殖ホルモンの働きを開始させるという仕組みを解明しました。交尾後の雄が雌猫に引っかかれ、自慢の毛並みもボロボロになってしまうのは、そのためのようです。このような猫の生態を視野に入れると、フラットマンがいうところの、「君たちの引っ掻き傷やボロボロの毛並み」は、雄同士の喧嘩によるものでなく、実は、雌猫からの攻撃の結果であるのかもしれません。また詩人は、「恋愛という仕事は、ゴロゴロと喉を鳴らすだけじゃないだろ？」とも言っています。「ゴロゴロと喉を鳴らすだけ」という姿は、この先に雌にどのような仕打ちを受けるかも知らない雄猫を揶揄しているようにも思われます。交尾刺激でより一層発情する雌に比べて、雄猫は、雌猫たちよりも早く、そして容易に発情します。例えば、マタタビのような植物に含まれる物質も、雄猫の性的な誘発剤となります。[5]

---

[3] 内田百閒『ノラや』230 頁。世界の文豪たちにも根っからの猫好きは多いですが、こんなにも猫の失踪をめぐって大騒ぎした作家は百閒以外にはいないでしょう。ドイツ文学者であった百閒は、どこからか家に紛れ込んできた野良猫「ノラ」が失踪した際に、何度も新聞の折り込みチラシにノラの捜索依頼（英語版までも）を出しています。猫の生態の観察とノラの失踪後に家に居ついたクルツへの百閒の愛情表現も必読です。

[4] デズモンド・モリス『キャット・ウォッチング 1』178 頁。Morris (1986), pp. 110-111.

[5] マタタビに含まれている揮発性のマタタビラクトンという成分は、猫の大脳をマヒさせ、眠気を引き起こし、運動中枢や脊髄などの反射機能を鈍らせると考えられています。猫の上顎にある、フェロモン物質を感知するヤコブソン器官が、マタタビラクトン類などに反応し、その信号が脳に伝わるという仕組みのようです。動物心理学者の黒田亮 (1890-1947) はエッセイ「猫にマタタビの誘惑」の中で、「マタタビが猫をひきつける理由」として「その香の猫に対して持つ性欲的意味」を挙げ、仔猫を含め、いろいろな猫で実験をして、性的に成熟していない仔猫や、雌猫はマタタビには反応しないことも多いと考えられています。谷崎潤一郎ほか『猫は神様の贈り物 《エッセイ編》』158-168 頁を参照してください。

一方で、雌猫は、雄猫より発情までの時間が長くかかるものの、その後は、狂ったように雄を求めます。最初の交尾を終えて 30 分ほどで、雌猫は再度セックスに興味を示すことが知られています。[6]　雌に比べると雄猫の性欲は早く減退します。そのため、恋の歌を歌って雌を誘っていた雄猫を、今度は雌猫のほうが追いかけていく、というわけです。交尾の後はすぐに性欲がなくなって「恋の発作」から覚めてしまう雄猫は、もし人間だったら、何日も相手を変えながら発情する雌猫を「売女」と吐き捨てることになる。一匹の雌猫が多くの雄猫と交尾する様子は詩人たちによって、一種の売春婦と重ねられることとなります。フラットマンは猫に重ねながらロマンチックな人間の恋心も性欲と結びついていることを暴露しています。「君たちは、経験でわかるのさ、恋の発作はすぐに終わるということを。/ ねこちゃん！ねこちゃん！は長くは続かない、「売女猫め！」へと変わるのだ。」原文にある ‘Pussy’ はかわいらしい仔猫を表現する英語ですが、愛しい女性にも使われる単語です。

娼婦猫―　『キャッツ』のグリザベラとマグダラのマリヤ

前号掲載の拙論でも言及しましたが、ロンドンのウェストエンドでは、アンドリュー・ロイド・ウェーバー作の『キャッツ』と題されたミュージカルがロングランを続けています。[7] このミュージカルでは、一匹の猫だけ天上に上ることができる。その猫は誰か？と案内役でもある長老猫デュータロノミーが歌います。最終的に娼婦猫グリザベラがその一匹に選ばれます。娼婦猫グリザベラは、かつては売れっ子の娼婦だったのですが今は年老いて、みすぼらしい恰好ででてきます。[8] この娼婦猫が猫たちの中から選ばれて聖人になるというモチーフは、聖書の中のマグダラのマリヤの描写を思い出させるものです。娼婦マグダラは涙によって悔い改め、キリストの足を髪でぬぐい、聖人と化し、キリストの復活にも立ち会った

---

[6] 猫の交尾事情については今永忠明『飼い猫のひみつ』187-200 頁を参照してください。

[7] 『キャッツ』では月夜の晩に集って集会をする猫たちが、同じロンドンのゴミ捨て場に集まっている、というところでつながっているだけで、それぞれの猫がそれぞれの物語をもっています。野良猫たちは夜集まって集会をしているようですが、昼はそれぞれの縄張りにいて、他の猫と一緒に生きているわけではないし、他の猫が何をしているか、詮索をするわけでもない。ミュージカル『キャッツ』の感想としては、ストーリー展開が物足りない、そもそも何も事件が起こっていない、という批判も多いようですが、エリオットもウェーバーもうまくこの群れないという猫性を表現しているような気がします。

[8] ちなみにエリオットの原作では、『キャッツ』中の唯一のプロットである娼婦グリザベラも登場しません。ロンドンの街中の娼婦は、ヴィクトル・ユゴー原作のミュージカル『レ・ミゼラブル』の元娼婦ファンテーィヌを想起させる演出ともなっています。『キャッツ』におけるグリザベラについては池田正之『猫たちの舞踏会』85-92 頁を参照してください。

といわれることもあります。この、選ばれし者だけが聖人となって天上へ上るという概念ー『キャッツ』では車のタイヤに乗って天へとあがっていくのですがーは、アポテオーシス (apotheosis) という概念に基付くものと言えるでしょう。キリスト教では肉体の死後、一度煉獄という場所に行って軽い罪を悔い改め、それから魂が天国へと昇っていく、と考える人もいます。そのように、生きた間での軽い罪を悔い改めることなしに天へと昇っていくのです。カトリック的ではなく、プロテスタント的ということです。

ただし、先にみたように、交尾を終えるとすぐに他の雄猫に発情する雌猫の性質を考えると、グリザベラという一匹の雌猫だけが娼婦猫、という設定もなんだかおかしいような気もしますが、ロイド・ウェーバーもまた、交尾をする猫たちの姿に、人間界の娼婦の事情を重ね合わせたと考えられるかもしれません。

しっぽをピンと立てて颯爽と・・・

詩の最後にフラットマンは、「ただ、猫たちは、家や/ 壁から落っこちても/ 足から着地し、しっぽをピンと立て、颯爽と去っていく」といいます。喧嘩に負け、もしくは雌猫に攻撃されようと、人間の男たちとは違って、威厳は忘れない猫たちに、心の中で拍手を送っているような表現です。フラットマンは、猫の世界に人間を投影していますが、猫のことをきちんと観察もしています。アメリカでの実験例があるそうなのですが、猫は 5 階程度の高さから落ちても、体をくるっと反転させ、落ちた瞬間、一瞬にして体勢を立て直し、足から無事に着地できる、と考えられています。猫が背を下にして落ち始めると、自動的に身をよじる反応がはじまるそうです。その理由としては、猫は、三半規管が高性能で、かなりの高さから落ちても、態勢を立て直すことができるためと考えられています。頭や顔の重力に対する向きを自動的に計算し、体が倒れてしまわないように調整することができるのです。そして足から着地した猫は、しっぽをピンと立てて、颯爽と去っていく。[9]

仔猫の毛並み問題と仔猫たちの試練

さて、こうして多数の雄と交尾をした雌猫から生まれる仔猫にどのような現象が起こるかというと、一回に生まれる仔猫の毛の色がバラバラ、という事態になります。小林一茶も猫の恋をうたった一連の句の中で、「猫の子の十が十色の毛並み哉」と書いています。人間界では不貞の問題が起こりそうですが、猫たちはその状況を知ってか、知らずか、猫界ではそれがもとでトラブルになるようなことはありません。雄猫の遺伝子に拠っても猫の毛並みは、決まりますが、DNA の遺伝情報だけで決まるのではなく、仔猫の発生段階での環境に左右されます。[10] また、猫の世界では、一般的には雄猫は子育てには参加しないといわれ

---

[9] モリスの「どのようにして足から落ちるか」(‘How Does a Cat Manage to Fall on Its Feet?) の論考（『キャットウォッチング 1』184-185 頁）等を参照してください。Morris (1986), p. 114.

[10] この仕組みは最近まで解明されておらず、アメリカのペットのクローン会社が倒産しま

ています。[11] どれがわが子かわからない状態では、無理もないかもしれません。

仔猫たちにも試練が待っています。体が大きくなるまでは、いろいろな敵から身を守らなければなりません。トンビやカラスといった鳥類だけではなく、仔猫の敵のなかには、「あぶれオス」と呼ばれる、雌と交尾できなかった雄猫が含まれます。このあぶれオスは、子育てをしている間、雌猫は発情しないため、雌猫が巣から離れている瞬間を狙って仔猫たちを殺してしまいます。雌猫の出産は春と秋の年に 2 回。春に生まれた仔猫たちは、秋になると母親から離れなくてはなりません。[12] そして母親猫から自立した仔猫たちにも、様々な物語があります。[13]

した。亡きペットの再生を求める人間を相手にしたクローンビジネスは、犬では成功したのですが、猫ではうまくいかなかったそうです。（竹内薫「ネコと科学と国家」『ユリイカ　平成 22 年 11 月号』130-131 頁。）ここ数年で、徳島大学の研究者が猫のクローン生産に成功したそうですが、やはり他の動物と比べて難しいそうです。

[11] 近年では、父親猫も子育てをするという新たな説も唱えられています。今永『飼い猫のひみつ』137-142 頁を参照してください。

[12] アメリカの小説家、アーシュラ・K・ル＝グウィン (Ursula Kroeber Le Guin, 1929-2018) の『空飛び猫』(*Catwings,* 1988) の中では、新しい雄と結婚する母親猫から仔猫たちが自立することが次のように描かれています。

> "[. . .] Mr. Tom Jones proposed to me last night, and I intend to accept him. I don't want you children underfoot!"
>
> All the children[=kittens] wept, but they knew that that is the way it must be, in cat families. They were proud, too, that their mother trusted them to look after themselves.
>
> (Ursula K. Le Guin, *Catwings*, p. 16)

> 「・・・ゆうべトム・ジョーンズさんが私に結婚の申し込みをしました。私はその申し込みを受けるつもりです。そうなると、子どもたちは邪魔になるのです」
>
> 子猫たちはみんなしくしく泣きました。でもみんなにはわかっていました。猫の親子にとってはそれが当たり前だということが。子猫たちはまた誇らしくも思いました。これなら大丈夫、もうちゃんと独り立ちできるとお母さんが認めてくれたわけですから。
>
> （村上春樹訳、ル＝グウィン『空飛び猫』、19-20 頁）

[13] 内田百閒は『ノラや』の中で、ノラが仔猫が水甕の中に落っこちた後、ノラの母親が新しい仔猫を身ごもってノラを邪険にし始めたことがきっかけで、ノラが百閒宅に居つくことになったといっています。

> （ノラは）もうすつかり乳離れしてゐる様で、あまり親猫の後を追つ掛けない。親猫の方はその内にまた次の子供が出来かかつてゐる様子で、彼をうるさがりだした。何分共よろしくお願ひしますと口に出しては云はなかつたが、さう云う風にどこかにいって

猫は大人にならない？— 猫性と幼児性

日本で初めて猫の鳴き声が文学作品に登場したのは、紫式部の『源氏物語』の中で、そこで猫の鳴き声は「ねうねう」と表現されています。[14] これは現代では「にゃあにゃあ」という表現になるでしょう。猫がにゃあと鳴くのにも理由があります。そこには母親に対する仔猫の愛情表現が潜んでいます。

飼い猫は野良猫に比べていつまでも幼い（特に去勢手術を行った場合はその兆候が顕著になる）ことが知られています。生物学的には生後 10 か月ごろには体は成熟すると考えられていますが、一方で、猫の精神年齢は 2 歳程度に過ぎないといわれることもよくあります。これには猫の生物学的な理由があります。猫は性的には成熟した個体でありながら、非生殖器官に幼い体質が残る、ネオテニー（幼形成熟）という性質を持っていると考えられています。犬の場合、幼犬から成犬へと成長するにしたがって頭蓋骨も同じように成長するのですが、猫は仔猫から成猫へと成長しても頭蓋骨の大きさに変化はみられません。ちなみに松苗あけみは「少女漫画は猫の顔」のなかで、猫の瞳を少女漫画の眼に喩え、「猫の目玉２つは脳みそ１個分より大きい＆重いとか　しかしどーみても目玉ひとつぶんより小さい脳です」「頭のよさよりも見た目の可愛さをえらぶとは」「そしてあの小さくて上品な口元　それに合わせてあごなんかないぐらいに小さい」「人間にたとえて見ると幼児顔です」と表現しています。[15]

そして、いつまでも大人にならない猫は、成長しても人間に対して、にゃあ、と鳴き、構ってもらおうとアピールしているのです。仔猫が母親猫に助けてもらいたいときに発する、にゃあという声は、仔猫が母親猫に訴え続ける声と捉えられています。野生の猫は母と子の関係のための音声をもっていて、成長するにしたがっておとなの生活のための音声と置き

しまった。

（内田百閒『ノラや』9 頁）

[14] 『源氏物語』の終盤で、ひとつの不倫事件に猫が一役を買ったことはよく知られています。光源氏と女三宮の邸宅の庭で、柏木らの若い男性が蹴鞠をしていたところ、女三宮の部屋の中で飼われていた猫をつないでいた紐が絡まり、女三宮の御簾が上へあがってしまいます。この猫のいたずら（もしくは計らい）で、柏木は女三宮の姿を見てしまい、ひとめぼれをしてしまい、恋心を募らせるようになります。柏木が物思いにふけって縁席近くで寝ていると猫がやってきて「ねうねう」と鳴くと紫式部は表現しています。「にゃあにゃあ」という現代の表記の元となった「ねうねう」の音の中には「早く寝よう寝よう」という性的な意味が隠されていることも指摘されています。田中貴子『猫の古典文学誌』38-46 頁を参照してください。

[15] 松苗あけみ「少女漫画は猫の顔」『ユリイカ　特集　猫—　この愛らしくも不可思議な隣人』84 頁。

換えますが、家猫はいつまでも仔猫気分が抜けないため、この子どもの音声を持ち続けます。その音声に多少改良を加え、環境によってこの変化は多様化し、猫は 100 種類もの異なる音をもつという説もあります。[16] 猫を飼った経験がある人には想像しやすいと思いますが、ごはんのとき、トイレのとき、構ってほしいとき、怖い時、と、飼い猫はいろいろな声で鳴きます。

とりわけ仔猫の必殺技は、声の出ないニャーオ、と、ふみふみ、というなんとも不思議で魅惑的な行動です。

サイレント・ミャオ

前号の拙論でも取り上げましたが、『サイレント・ミャオ』(*The Silent Miaow*) と題した書の中で、猫語翻訳家を名乗るポール・ギャリコ (Paul Gallico, 1897-1976) は、人間の家に見事に入り込んだ、元野良猫の語り手にのように語らせています。

> I cannot begin to tell you how effective the Silent Miaow can be for breaking down resistance, always provided you don't overdo it but save it for the right moment.
>
> The technique for this ridiculously simple. You look up at the subject, open your month as you would for a fully articulated miaow, such as you emit if, say, you wish to leave the room and want the door opened, or are hungry or irritated by something, except in this case you permit no sound to issue.
>
> The effect is simply staggering. The man or the woman appears to be shaken to the core, and will give you practically anything, which is why I say you must not use it often, for one of the human traits, in fact reduced to a proverb, is that 'Familiarity breeds contempt'. Whereas in our [=cat's] world, as you know, the proverb reads, ''Familiarity breeds contentment'.
>
> (Paul Gallico, *The Silent Miaow*, p. 104)

欲しいものがあるとき、この「声を出さないニャーオ」はすごいききめを発揮します。ほんとうよ。でも使いすぎてはだめ。ここぞという時のためにとっておかなくては。

このやりかたは実に簡単です。ふつうのニャーオ、たとえば「外に出たいからドアを開けて」とか「おなかがすいた」とかの意味を伝えるニャーオをいうときと同じに、相手を見つめて口を開けます。ただし声は出しません。

たったこれだけのことなのに、その効果たるや劇的です。男も女も心を揺さぶられて、まずどんなことでもしてくれます。あんまり効果があるからこそ、使い過ぎが禁物なの。なぜなら人間は、ことわざふうにいうと「ごちそうも毎日ではもうけっこう」というと

---

[16] デスモンド・モリスは、猫はホモ・サピエンス以外のどの動物よりも複雑な声を出すと考えています。モリス『キャット・ウォッチング 2』37-53 頁。Morris (1987), p. 17-26.

ころがあるの。これが猫なら「ごちそうなら毎日でもけっこう」なのにね。

（灰島かり訳、ポール・ギャリコ『猫語の教科書』136-137 頁）

声を出さないニャーオ。ギャリコ（が猫語翻訳を試みている猫）はこの鳴き方について、さらに次のように続けています。

> Even I, who have made a lifelong study of the human species, am not able to tell you exactly why the Silent Miaow has this devastating effect, or even the exact emotion it inspires in people. The nearest I can come to it is that it creates a picture of helplessness that the God syndrome is unable to resist. We are already fortunate that certain notes of our spoken language, the miaow, resemble the cries of their own infants, the sound with which their young communicate their need for food, warmth, attention, or whatever it is they may be lacking. People have become conditioned to immediate response to this baby-wauling and thus, by association, a similar desire to do something about it can be evoked by the properly placed and pitiful miaow.
>
> (Paul Gallico, *The Silent Miaow*, pp. 104-105)

> ものごごろついて以来、人間の研究を続けている私ですが、この声なしのニャーオがなぜこれほど力があるのか、人間の心のどんな部分にうったえるのか、すっかり解明できたことはありません。まあ、こういうことかなと思えるのは、声なしのニャーオはあまりにもたよりなげな気配をただよわすので、人間は仏心をおこさずにはいられないというあたりでしょうか。もともと私たち猫のなき声ニャーオは、人間の赤ん坊がおっぱいを欲しがったり、だっこしてほしい時の泣き方に似ているので、ねこにはずいぶん有利です。
>
> （灰島かり訳、ポール・ギャリコ『猫語の教科書』137 頁）

この指摘のように、実際の猫たちが、自分たち猫族の鳴き声と人間の赤ちゃんの声が似ていると認識しているかどうかは定かではありませんが、赤ん坊の鳴き声に反応せずにはいられない人間は「猫にたよりなげにニャーオとされると、何かしてあげられなくてはという気持ちにかられるんでしょうね」とギャリコは語らせています。声を出せないほど弱っているのではないか、と、人間をかなり心配させる、声を出さないニャーオ。この効果は、元祖猫日記を書いたとされる宇田天皇にも発揮します。[17]

---

[17] 桐野作人『猫の日本史』16-17 頁。宇田天皇の記述に、桐野は「猫はのどをごろごろ鳴らして、口を開けてサイレント・ミャオをしてみせたものだろうか。サイレント・ミャオ（サイレント・ミュウ、サイレント・ニャアとも）とは鳴き声が出ない鳴き方で、高周波数の声がでているが聞こえないだけともいう。子猫と母猫のコミュニケーションともいわれている」と指摘しています。

ねこのふみふみ

そして、仔猫のもう一つの必殺技は、なんといっても、ふみふみ、でしょう。猫が身近にいない場合は、サイレント・ミャオと同様、「ふみふみ」という単語もピンと来ないかもしれません。エッセイ『今日も一日きみを見ていた』のなかで小説家の角田光代 (b. 1967) は猫界に存在する猫用語ー「辞書にはのっていなくとも、猫界の人に言えばすぐ通じる言葉」ーとして「ふみふみ」を挙げています。

> なんとなくその響きが照れ臭いというか恥ずかしいというか、かわいすぎて私はとてもそんな言葉はつかえないな、と思っていた。思っていたのだが、トトがやってきて、本当にふみふみすると、それはもう「ふみふみ」としか形容しようのない動作で、「うわーふみふみしてる」と、もう既に使ってしまっている。
>
> （角田光代『今日も一日きみを見ていた』56 頁）

前足でふみふみする行動は、もともとは子猫時代の習慣に由来するものです。おなかが空いたとき、母猫のおっぱいの周辺を前足で刺激することで、お乳の出をよくするために、このふみふみを行います。[18] 飼い猫の場合はいつまでも仔猫の気分が抜けず、ふみふみをすることが多くなるのです。これも猫が持つネオテニーの性質に由来するものでしょう。ふみふみという挙動は猫を飼っている人間にしかその詳細な様子はわかりにくいと思いますが、

---

[18] モリスは「なぜ前足であなたのひざをたたくのか」(‘Why Does a Cat Trample on YourLap with Its Front Paws?’) の項で、次のように言っています。

> ネコの飼い主ならだれでも、ネコがひざにとびのってきて、用心深く座りこむのを経験しているはずだ。ちょっと間をおいてから、ネコはまず片足、次にもう片足と、もむようなあるいは踏みつけるようなリズミカルなしぐさで、交互に前足を押し付けはじめる。そのリズムはゆったりと落ち着いていて、まるでネコがゆっくりと時を刻んでいるかのようだ。

この行為が強くなると爪がチクチクするので、飼い主は猫を追い払うが、ネコのほうは満足そうによだれまで垂らすと指摘しています。猫のこの行動は、母猫の乳を飲んでいる仔猫が前足で母猫のおなかを揉んでいる行為と同じものであり、よだれをたらすのは、仔猫がごちそうにありつけることを期待しているからだといいます。モリスはこの動作は「幼児行動の一環」と位置付けており、嫌がる飼い主とは対照的に、ネコにとってこの足踏みは「愛情の通った心あたたまるひととき」であると考えています（62-64 頁参照）。Morris (1986), pp. 30-32.

擬音語が多様な日本語では、ふみふみ、と表現されますが、英語では、‘knead’という単語で表現されます。この語は、もともとは「〈パン生地〉を捏ねる、もむ」という意味でつかわれています。そうやって出来上がるパンの塊（か定かではありませんが）は ‘The Cat loaf’ となります。これは日本語での「香箱座り」のことです。英語になると猫関連の用語が何故かパンに関連する単語で説明されているのも面白いです。

寺田寅彦 (1878-1935) は「舞踊」と題されたエッセイの中で愛猫「玉」がふみふみをする様子を以下のように描写しています。

> 死んだ「玉」は一つの不思議な特性をもっていた。自分が風呂場へ入るときによくいっしょにくっついて来る。そして自分が裸になるのを見てそこに脱ぎ捨てた着物の上に上がって前足を交互にあげて足踏みをする、のみならず、その爪で着物をひっかきまたもむような挙動をする。そして裸体の主人を一心に見つめてながら咽喉をゴロゴロ鳴らし、短いしっぽを立てて振動させるのであった。
>
> （寺田寅彦「舞踊」、谷崎純一郎ほか『猫は神さまの贈り物』34 頁）

どうやら家猫は、母親猫の柔らかさをもつものであれば、なんでもふみふみをするようです。ここで挙げられている「玉」は、寺田の脱ぎ捨てた着物ーおそらくきちんとたたまれていない状態で、ぐしゃっとなった形態の着物ーに飼い主のにおいを感じながら、ふみふみをするのでしょう。このエッセイの中で、筆者自身は、アダムの時代の野猫にも思いをはせながら、最後に、このふみふみは「人間の喜びに相当するらしい感情の表現として、回しで足踏みをする」と言っています。猫のふみふみは、母親猫を求める幼年期の猫の習性でありながら、また一種の愛情表現として考えられています。

おかあさんにゃん？

フランチェスコ・マルチウリアーノ (Francesco Marciuliano , b. 1967) の「ぼくは、かあさんをふみふみ」(‘I Knead My Mommy’) と題された詩の中では、仔猫が母親猫を求めて、「おかあさんにゃん？」と尋ねながら、いろいろな柔らかいものをふみふみしていきます。

> “Are you my mommy?” I ask
> As I knead the blanket
> Only for the family quilt
> to lie on the bed
>
> “Are you my mommy?” I ask
> As I knead the sweater
> Only to find that cashemere
> is easy to shred
>
> ……
>
> “Are you my mommy?” I ask
> As I knead your body
> Only to remove clump after clump

of chest hair

"You are my mommy!" I say
As I keep clawing your skin
Until I get bored and just
tear to your chair

(Francesco Marciuliano, 'I Knead My Mommy', ll. 1-8, 17-24)

「おかあさんにゃん？」とぼくはたずねる
毛布をふみふみしながら
ただ、家族のキルトが
ベッドにおいてあるだけなのだけれど。

「おかあさんにゃん？」とぼくはたずねる
セーターをふみふみしながら
ただ、カシミアって、とっても
ちぎれやすいってわかるだけなんだけど。

……
「おかあさんにゃん？」とぼくはたずねる
あなたのからだをふみふみしながら
ただ、つぎつぎと胸毛のかたまりを
むしりとるだけだけれど。

「おかあしゃんにゃ！」とぼくはいう
あなたの肌をかぎつめでひっかきつづけ
最後は飽きて、こんどは
破れるまで椅子をひっかく。

この詩の中で、仔猫は、「おかあさんにゃん？」と尋ねながら、いろいろな柔らかいものをふみふみしていきます。声にだしてみるとわかりますが、「ふみふみ」を意味する'knead' という単語は「必要とする」の意の 'need' と同じ音です。母親猫が何度も「おかあさんにゃん？」と繰り返しては執拗に「ふみふみ」する様子は、「おかあさんが要るにゃん」と甘えている様子が掛け合わされています。

ベットの上にあるキルト、カシミア、外に出て犬、鶏（犬と鶏をふみふみする連は先のページでは省略しています）そして人間の胸毛、最後には椅子。きっと、勝手にベッドに上が

り込み、ふみふみ。セーターの上にのって、ふみふみ。仔猫がふみふみするせいで、カシミアのセーターはボロボロでしょう。それから外にいると思われる犬や鶏。犬は眠っているのでしょうか。また家の中にもどって、「おかあさんにゃん？」と尋ねながら、今度は人間のからだをふみふみ。そうしているうちに、作者の胸毛にいきついたのでしょう。ふみふみして胸毛をむしり取ります。猫のふみふみを見たことがある人、猫にふみふみされた人なら経験があると思いますが、角田光代が次のように言っているように、ふみふみするときの力は結構強いです。

> トトは、うつろな目つきで何かを呪うようにふみふみをする。しかも力が妙に強い。爪は切っているのに、爪先が寝間着に引っかかり、私の寝間着は一部爪研ぎがわりになったかのようにぼろぼろである。暗闇のなかだから、ちょっとこわい。踏み踏みをしているうちに、のどの奥からごろごろごろごろ聞こえてきて、そしてごろごろいったままトトは眠る。・・・私はときどき、猛烈にほかの猫のふみふみを見たくなる。こんなに強くふみふみするものだろうか。みんなうつろな目つきでやるのだろうか。甘えというより呪いのように見えるのだろうか。本当は、その言葉の語感と同じく、もっとかわいらしい動作なのではないだろうか・・・・・・・。
>
> （角田光代『いつも君をみていた』57-58 頁）

角田の言葉をかりるのであれば、猫のふみふみは「うつろな目つき」で、「何かを呪うよう」でもあります。作詞家の、うちのますみは、ふみふみの様子を「ねこのグーパー　開いて閉じて」と表現します。猫のふみふみそのものは、「昼間の悪さ/ 忘れさせる/ 猫の作戦」であり、「魔法のふみふみ」なのです。[19] そして、寺田と同様に、角田もまた、猫をつぶさに観察する人間は、猫のふみふみには、機嫌がいい時のゴロゴロが付いてくることを猫の摂理として提示しているかのようです。

マルチウリアーノの詩の中の仔猫は最終的に「おかあしゃんにゃ！」と叫び、おそらく椅子に寝ていると思われる作者をさらにふみふみ。そうして、「最後は飽きて、こんどは/ 破れるまで椅子をひっか」きます。そのために、猫を飼っている家の椅子はボロボロになってしまいます。

猫が爪を研ぐのは、特に野生の猫においてはマーキングの要素があることが論じられています。猫にとって爪とぎは、小動物を捕獲するために武器である爪をとぐ行為に加え、自分の存在をアピールする行為でもあります。「猫の足の裏には匂いの線があって、椅子の布地をひっかくときにこれを強くこすりつける。布の表面に匂いをすりこみ、その椅子に自分

---

[19] NHKE テレ「ねこねこ 55」のエンディング曲「猫のふみふみ」（うちのますみ作詞、近藤研二作曲、うた杉林恭雄）より。

のサインを残す」と、モリスも観察しています。[20] 匂いによるマーキング。それは猫の縄張りと関係しています。

次号以降では、猫の縄張りと狩り、猫の五感と触覚、野良猫と家猫それぞれの時空間についてみていくことにしたいと思います。

参考文献

Alderton, David. *Understanding Your Cat*. London: Cico Books, 2007.

Boylan, Clare. *The Literary Companion to Cats*. London: Sinclair-Stevenson, 1994.

Bukowski, Charles. *On Cats.* Edinburgh: Canongate, 2016.

Cat Poems by the World's Greatest Poets. London: Serpent's Tail, 2018.

Carr, Samuel (ed.) *The Poetry of Cats* . London: Chabcellor, 1991.

Clutton-Brock, Juliet. *The British Museum Book of Cats. British Museum*: London, 1988.

Eliot, T. S. *Old Possum's Book of Practical Cats*. London: Faber and Faber, 1953.

Fragos, Emily. (ed.) *The Great Cat: Poems about Cats.* London: Everyman, 2005.

Gasztold, Carmen Bernos De. *Prayers from the Ark.* London: Pan Books, 1947.

Gallico, Paul. *The Silent Miaow: Manual for Kittens, Strays and Homeless Cats*. London: Pan Books, 1987.

Gettings, Fred. *The Secret Lore of the Cat: The Magic of Cats- in Myth, Legend and Occult History*. London: Grafton Books, 1989.

Guin, Ursula K. *A Catwings Tale: Catwings.* New York: Orchard Books, 1988.

Hearn, Lafcadio. *Glimpses of Unfamiliar Japan*. *Vol. 2.* Cosimo: New York, Tuttle: Vermont, 1964.

Howey, M. Oldfield. *The Cat: In the Mysteries of Magic and Religion*. Castle Books: New York, 1956.

Kern, Adam L. *The Penguin Book of Haiku.* Penguin,2018.

Klingender F. *Animals in Art and Thought to the End of the Middle Ages*. Routledge: London, 1971.

Lillington, Kenneth. *Nine Lives: An Anthology of Poetry and Prose Concerning Cats*. Jolly &Barber: London, 1977.

Marciuliano, Francesco. *I Kead My Mommy And Other Poems By Kittens.* San Francisco: Chronicle Books, 2014.

Morris, Desmond. *Catwatching.* Crown: New York. 1986.

---. *Catlore*. Crown: New York. 1988.

浅田次郎、日本ペンクラブ編『猫のはなし―恋猫うかれ猫はらみ猫』（角川文庫、2013 年）

池田正之『猫たちの舞踏会ー　エリオットとミュージカル「キャッツ」』（角川ソフィア文庫、2013 年）

[20] モリスは「なぜ、あなたの気に入りの椅子を（猫が）破くのか」(‘Why Does a Cat Tear at the Fabric of Your Favoriate Chair?’) の章で、猫の舞足の爪とぎについて、マーキングを理由に挙げています。『キャット・ウォッチング 1』52-54 頁。Morris (1986), pp, 21-23.

石寒太『加藤楸邨の 100 句を読む　俳句と生涯』（飯塚書店、2012 年）
一茶記念館・信濃毎日新聞社出版部編『猫と一茶』（信濃毎日新聞社、2013 年）
井伏鱒二、谷崎純一郎他クラフト・エヴィング商會『猫』（中央公論新社、2009 年）
今永忠明『飼い猫のひみつ』（イースト新書、2017 年）
内田百閒『ノラや』（中公文庫、1980 年）
内田百閒『贋作吾輩は猫である―　内田百閒集成 8』（ちくま文庫、2003 年）
大佛次郎『猫のいる日々』（徳間文庫、2014 年）
河合隼雄『猫だましい』（新潮社、2000 年）
角田光代『今日も一日きみを見てた』（角川書店、2015 年）
角田光代、萩原朔太郎、村上春樹他『猫なんて！―　作家と猫をめぐる 47 話』（キノブックス編集部、2016 年）
角田光代、吉田修一、村山由佳ほか『ものを書く人のかたわらには、いつも猫がいたー　NHK ドキュメンタリー　猫も杓子も。』（河出書房新社、2019 年）
金子信久『ねこと国芳』（パイ　インターナショナル、2012 年）
桐野作人編『猫の日本史』（洋泉社、2017 年）
倉阪鬼一郎『猫俳句パラダイス』（幻冬舎新書、2017 年）
小泉八雲『光は東方より』平川佑弘訳（講談社学術文庫、1999 年）
小宮豊隆編『寺田寅彦随筆集　第一巻』（岩波文庫、1947 年）
竹内薫「ネコと科学と国家」『ユリイカ　特集　猫―　この愛らしくも不可思議な隣人』（青土社、2010 年）
田中貴子『猫の古典文学誌　鈴の音が聞こえる』（講談社学術文庫、2014 年）
谷真介編『猫の伝説 116 話―家を出ていった猫は、なぜ二度と帰ってこないのだろうか？』（新泉社、2013 年）
谷崎潤一郎『猫と庄造と二人の女』（中公文庫、2013 年）
谷崎潤一郎、寺田寅彦、大佛次郎他『猫は神さまの贈り物　エッセイ編』（実業之友社、2014 年）
夏目漱石『吾輩は猫である』（新潮社、2013 年）
日本民話の会/ 外国民話研究会編訳『世界の猫の民話』（ちくま文庫、2017 年）
ねこまき（ミューズワーク）『ねことじいちゃん』（KADOKAWA、2015 年）
萩原朔太郎『猫町』（版画社、1935 年）
萩原朔太郎、村上春樹他『猫なんて！―　作家と猫をめぐる 47 話』（キノブックス編集部、2016 年）
佛渕健悟・小暮正子編『俳句・短歌・川柳と共に味わう　猫の国語辞典』（三省堂、2016 年）
堀江珠喜『猫の比較文学　（猫と女とマゾヒスト）』（ミネルヴァ書房、1996 年）
復本一郎校注『鬼貫句選・独ごと』（岩波文庫、2010 年）
堀本裕樹・ねこまき（ミューズワーク）『ねこのほそみち』（さくら舎）
松苗あけみ「少女漫画は猫の顔」『ユリイカ　特集　猫―　この愛らしくも不可思議な隣人』

（青土社、2010 年）
松本舞「猫と文学 ―　その壱（ヨーロッパ篇）」『表現技術研究論集　13』（広島大学表現技術プロジェクトセンター、2018 年）
松本舞「猫と文学 ―　その弐（英詩篇）」『表現技術研究論集　14』（広島大学表現技術プロジェクトセンター、2019 年）
和田博文編『猫の文学館 I　―　世界は今、猫のものになる』（ちくま文庫、2017 年）
和田博文編『猫の文学館 II ―　この世界の境界を超える猫』（ちくま文庫、2017 年）
アーシュラ・K・ル＝グウィン『空飛び猫』（村上春樹訳、講談社文庫、1996 年）
ポール・ギャリコ『猫語の教科書』（灰島かり訳、ちくま文庫、1998 年）
デズモンド・モリス『キャット・ウォッチング　1 －なぜ、猫はあなたを見ると仰向けに転がるのか？』（平凡社、2009 年）
デズモンド・モリス『キャット・ウォッチング　2 －猫に超能力はあるか？』（平凡社、2009 年）

（まつもと　まい、広島大学大学院文学研究科助教）